

生成の世界における「待つこと」

——「充実した生」をめぐるサンテグジュペリの洞察を手がかりに——

学校教育学研究室 藤 田 幹 夫

“Waiting” in the World of Becoming

—Based on Antoine de Saint-Exupéry’s insights into “replete life”—

Mikio FUJITA

The present article attempts to explicate the nature of “waiting”, especially in the world of becoming.

In Chapt. I, the manifold structure of “waiting” is illustrated through two articulations; 1) into “hope”, “patience”, etc., on the subjective aspect of “waiting” (IA1), and, 2) into the worlds of “nature”, “instrument-machinery”, and “becoming”, to which the objective aspect of “waiting” belongs (IA2). Next, “waiting” in the world of becoming is characterized by 1) the indefiniteness of the objective aspect, 2) the larger context including manipulation, and, 3) the mutually dependent relationship between the subjective and the objective aspects. (IB).

In Chapt. II, “démarche (walking)” is outlined which plays a central role to the description of “replete life” in *Citadelle*, written by Antoine de Saint-Exupéry. This “démarche” is found to satisfy the three characteristics of “waiting” in the world of becoming (IIA). Then “démarche” is further featured with respects to its temporal structure (IIB) and to its other moments: the relationships between others and self, and, between objects and self (IIC). Lastly, the implications of the above explication are drawn on to the problem of “errors” in the world of becoming. (IID).

目 次

はじめに

I 「待つこと」の多様性と、生成の世界における「待つこと」

A 「待つこと」の多様性

1 「待つこと」の主観的な側面

2 「待つこと」の対象的な側面

B 生成の世界における「待つこと」

II 「歩み」

A 充実した「待つこと」の二つの様相

1 「熱情」

2 「歩み」

B 「歩み」の時間的構造

1 未来と現在

2 過去と現在

C 「歩み」における時間以外の諸契機

1 他者と自己

2 事物と自己

D 「あやまり」と「歩み」

おわりに

注

はじめに

教育実践のなかで、「待つこと」は、大きな位置を占めている。そのことは、授業中に教師が子どもの理解や表現を「待つこと」がどれ程の時間的割合を占めるかという、外面的な観察からも納得できよう。また、教育の全体を子どもの成長を「待つこと」であると言いうることからも感得できよう。だが、教育研究のなかでは、「待つこと」はあまり取り扱われてこなかった¹⁾。そのためもあってか、私たちの常識的理解の中では、たとえば授業において教師が子どもを「待つこと」について、それが、非能率的で空虚な時間であるという一方の見解と、

子どもの理解や表現を発酵させる重要な時間であるという他方の見解との両者が、対立したまま、膠着状態が続けている。そして私たちが、この膠着を越えていく手がかりをつめないために、「待つこと」は研究の対象とはならなかった。こうして、ひとつの悪循環——研究されなかったためによくわからない、よくわからなかったために研究されない——が形成されている。

その悪循環の理由のひとつは、「待つこと」の多様性を適切に把握することがむづかしいことである。そこで本稿では、まず、「待つこと」の多様性の内容的な確認を行う（IA）。次に、その確認を背景として、特に教育に関連性の強い、生成の世界における「待つこと」を「待つこと」一般から浮き彫りにする（IB）。

そして、Ⅱ章において、サンテグジュペリの遺著『城砦』²⁾における、充実した「待つこと」の記述を検討し、生成の世界における「待つこと」をさらに豊かに理解する手がかりを探る。「待つこと」は、『城砦』のテーマである「充実した生」において、中心的な役割を果たしている³⁾。

『城砦』は、筆者がこれまで、意欲とか動機づけ、生きられている意味、ひいては「充実した経験」を対象として研究してくるなかで出会った、特に示唆するところの多い作品だった。

I 「待つこと」の多様性と、生成の世界における「待つこと」

A 「待つこと」の多様性

「待つこと」一般を理解するために、まず、日常的世界における「待つこと」のひろがりを見つめることにしよう。

もの心つきはじめた子ども時代、遊び疲れた空腹をかかえて夕飯やおやつを「待ち」、朝早く目覚めすぎて、そとが明るくなり、親や兄弟が起き出して来るのを「待つ」といった「待つ」からはじまって、小学校へ行く頃ともなれば、授業の終わる休み時間や放課後を「待ち」、プール指導のはじまる梅雨明けを「待ち」、あるいは、何をしようかと考えながら、楽しい夏、冬、春の休みを「待ち」、正月や誕生日を指折り数えて「待つ」の「待つ」。

期待にわくわくしながら遊びに行く、目的地に向かったバスとか電車に乗った行き道がこんなにも長いのに、帰り道はどうして早く着いてしまうのだろうか、と疑問を感じたりすることもある。目的地に着くのはまだかまだかと「待ったり」とすると、まるで誰かに「意地悪」をさ

れているかのように、かえってその到着が長く耐えられないものに感じられるので、到着に対して自分が無関心であることを装おうことによって、そのような「意地悪」を未然に防ぎ、到着の遅延という苦しみを味わわずにすむようにするといった、一種の「悟り」を伴う「待つ」⁴⁾。

受験勉強をしている中学生、高校生の、これから迎える高校や大学での生活に対する、あこがれを伴った「待つ」や、くたびれてしまった「待つ」。

さらにまた、さまざまな友だちとのつき合いや、就職してからの人間関係、結婚、子どもの誕生などを通じて、自分の行為の成就が他者の行為の成就に依存している場合にぶつかり、そこでもまた、新たな「待つ」が生まれる。

そして、年をとるとともに、恐れったり、悲しんだり、諦めたり、無視したり、あるいは希求したりしながら、私たちは死を「待つ」。

以上の概観からすぐうかがえるように、私たちの成長とともに、「待つ」という経験の内実がさまざまに変化していくことがわかる。

だが、「待つこと」一般の多様性は、成長の段階を考えればそれですむというわけにはいかない。私たちの日常的な世界を超えたところにも、多様な「待つこと」が存在しているからである。たとえば、強制収容所という「限界状況」(ヤスパース)のなかでの「待つ」⁵⁾。狩猟に出かけた部族の若者たちの豊猟が、自分の踊りに左右されるということを信じて、儀式的な踊りを彼らの帰還まで続ける酋長の「待つ」。そういった、さまざまな社会や時代における多様な「待つこと」があり、さらに、トロイ戦争が終わってから故郷イタケーにたどり着くまで20余年の流浪生活を送ったオデュッセウスの「待つ」や、永遠に山頂へと石を運びあげる刑罰を課せられたシジフォスの「待つ」など、神話や文学のなかに描かれた多様な「待つこと」がある。これらの多様な「待つこと」のすべてを、「待つこと」一般の概念は包括できなくてはならない。だが、たとえ「待つこと」にどれだけ多様な形態があろうと、「待つこと」一般に常に妥当することがあるのではないだろうか。

日常生活のなかではあまりにも自明であるが故に、かえって主題的に考察されにくいことがらがある。「待つこと」について言えば、あらゆる「待つこと」において、その明確さの程度に差があるにせよ、常に「待つべきことがら」が存在するということが、また、その色合いがどのようなものであれ、常になんらかの「待ち方」が存在するということが、それがである。私たちは、これが

ら、この「待つべきことがら」を「待つこと」の対象的側面と呼び、「待ち方」を主観的側面と呼び、私たちの考察の主題としていこう。

この二つの側面から、「待つこと」一般の多様性を、さらに内容的に充実し、分節化した形で把握することに努めよう。

1. 「待つこと」の主観的側面

この側面については、すでに、ボルノウによる研究がある。ここでは、そのなかの二つのこと、すなわち、「忍耐」の記述、ならびに、「希望」と「期待」との対照に注目したい。

「忍耐」Geduld は、第1に、人間の仕事との関係において、「性急」Hast と「焦燥」Ungeduld と対比される。「性急」とは、自己の行動において能動的に、現在をとびこえて未来へと突入することであり、「焦燥」とは、待ち受けることにおいて受動的に、未来を自分の中に引き入れることであると特徴づけられる。能動的・受動的の違いがあるにせよ、「性急」と「焦燥」において私たちは、「自然な時間的推移を促進して、これをとびこえよう」と願っている。それらと対比して、「忍耐は、人びとが客観的な時間的推移を望む度合と、客観的な時間的推移自体との間の調和のなかにある」とされる⁹⁾。

「忍耐」は、第2に、他の人間に対する関係において、「温順」Sanftmut、「慎重」Behutsamkeit、および「寛大」Nachsicht と対比して特徴づけられる。「温順」は、「緩慢な、恒常的な、度を過ぎた硬さがないということと同じ」であり、「本来時間的性格なしに、まったく現在のなかに現われる」という特徴をもつ。「寛大」は、「その人間の（過去の）過失を取り上げないこと」であり、「未来に対しても、よりよいことを何も期待していない」という特徴をもつ。これらとの対比を通して、第2の場合の忍耐は、①過去の完了したでき事にかかわるのではなく、期待に対して遅れをとっているという事態にかかわっていること、②「未来に対する信頼に満ちた関係」という前提が存在する限りにおいてのみ可能であること、によって特徴づけられる¹⁰⁾。そしてボルノウは、他の人間に対する「忍耐」がとりわけ教育者にとって重要であること、また、この「忍耐」が「気の弱さ」Schwäche や「無関心」Indifferenz と混同されてはならないことを強調している¹¹⁾。

さらに第3の場合として、「忍耐」は生一般との関係において考察される。この場合、「忍耐」は、「苦しみに順応することではなく、同時によりよい未来にたいする関連を含んでいる」ことによって特徴づけられる。だから

らこそ人間は、「大きな総括的な〈存在の意味〉によって、支持されていると感じるときにのみ、忍耐強いことができる」とされる。そして、このような「忍耐を仕事の際のたんなる根気と等置してしまった、啓蒙主義的理解」の表面性を、ボルノウは指摘する¹²⁾。

三つの場合における「忍耐」を記述した後で、ボルノウは、「待つこと」の根底をなす「希望」Hoffnung を「期待」Erwarten と対比させて明らかにする。両者とも未来に関係しているのだが、「期待」においては、①外見上の受動性にもかかわらず緊張した強い内的能動性があり、②期待していることがらの生起が確信されており、③そのことがらが身近にさし迫っており、④明確に表象されている、という特徴がある。これに対して、「希望」においては、①辛抱できない希望がないことからしてわかるように、ある種の内的弛緩状態があり、②希望していることがらの生起は確実には知られておらず、③そのことがらが漠然と遠い未来にあり、④表象が不明確であるという特徴がある。ボルノウは、この対比にたって、「期待」を「閉じられた時間」と呼び、「希望」を「開かれた時間」と呼んでいる¹³⁾。

以上、筆者は、「待つこと」の主観的側面について、ボルノウの研究に依って、「忍耐」と「希望」を中心に、ひとつの分節化を提示した。それは、網羅的なものでもないし、また、可能なひとつの分節化にすぎない。とはいえ、これによって、「待つこと」の多様性を、単に内容的に空虚な形で理解することから、内容的に一步充実した形で理解することができる。

2. 「待つこと」の対象的な側面

「待つこと」においては、常に待たれている何ごとかが存在する。すでに、主観的側面の分節化を概観していくなかで、「忍耐」をどのような関係における「忍耐」であるかによって場合分けすることが必要であったように、「待つべきことがら」の側面に着目して分節化することができる。

この側面については、私たちの日常世界の知が、主観的側面におけるほど混乱してはいないので、分節化は相対的に容易である。すでに常識において、対象的な側面についての以下の分節化を認めることができる。すなわち、「待つべきことがら」が、自然的世界のできごと（日の出を待つ、花が咲くのを待つ、暖かな季節を待つ、等）であるか、道具的・機械的世界のできごと（コンピュータのプリントアウトを待つ、蛍光灯がつくのを待つ、等）であるか、社会的世界のできごと（友人の来訪を待つ、約束が履行されるのを待つ、等）であるか、人間の生成

のできごと（子どもの成長を待つ、作品の完成を待つ、表現や理解の発生を待つ、等）であるか、という分節化である。

この分節化と重なるところの多いものに、シュッツの分節化がある。シュッツは、生活世界の生きられている時間の分析を行い、bodily time, social time (calendar time), world time, subjective time という時間の諸次元を抽出している。さらにシュッツは、私たちはそれらの時間次元を同時に生きているのだが、それらの時間次元相互の間にズレがあり、そのために私たちが待たねばならないのだと指摘している¹⁴。

シュッツのこの指摘は重要である。この指摘を本稿での言葉使いで表現すれば、「待つこと」は一般に多くの異った世界にまたがっており、「待つべきことがら」もまた、同時に多くの世界に属しているのだ、ということになるろう。

一例を挙げよう。先に、「花が咲くのを待つ」を、自然的世界における「待つこと」の例として挙げた。しかし、個々の具体的な「花が咲くのを待つ」は、それぞれの特異性に依拠して、異なった世界の「待つこと」の性格を同時に兼ね備えることができる。たとえば、機械化が進んだ園芸企業においては、さまざまな技術的手段を講じて、ある程度まで、開花を早めたり遅らせたりすることができる。そのために、そこでの「花が咲くのを待つ」は、道具的・機械的世界の「待つこと」の性格を兼ね備えるであろう。しかし、たとえば、ある木を大事にしている老人が、害虫を取り除き肥料をやり、混んだ枝を剪定して、そして「花が咲くのを待つ」場合には、その「待つこと」は、生成の世界における「待つこと」の性格を兼ね備えるであろう。このように、ある特定の一事象の生起を、先程挙げたさまざまな世界へと一義的に分類することはできない。だがそれにもかかわらず、「花が咲くのを待つこと」は、常に、多かれ少なかれ、自然的世界における「待つこと」の性格を帯びていることもまた確かである。そのような一般的なレベルにおいて、「待つべきことがら」が基本的に属している世界が存在する。上述のいくつかの世界も、そのように理念化された世界であることに留意したい。

B 生成の世界における「待つこと」

これまで私たちは、「待つこと」の対象的側面と主観的側面のそれぞれにおける分節化によって、多様な「待つこと」一般を理解してきた。教育における「待つこと」とっては、対象的な側面での分節化に従えば、とりわけ人間の生成の世界における「待つこと」が重要で

ある。そこで、生成の世界における「待つこと」を、他の世界を含めた「待つこと」一般から区別し、特徴づける必要がある。

「生成」Werden, devenir, becomingの世界とは、特に人間の生に特徴的な世界、私たちの理解・表現・創造が行われ、それらを通して私たちがより高次の存在へと変化していく世界を意味する。生成の世界は、社会的世界という広範な世界の一部をなしているとも考えられる。しかし、ここでは、友人の来訪を待つとか約束の履行を待つとかの、たんなる社会的世界の「待つこと」から、生成の世界における「待つこと」が区別されることを指摘するにとどめる。

さて、生成の世界における「待つこと」を対比を通して明らかにするために、まず第1に、道具的・機械的世界における「待つこと」を特徴づけてみよう。道具的・機械的世界においては、道具や機械が使用される以前に、ある目的がすでに存在し、道具や機械はその目的を実現する手段である。もちろん、故障とか失敗が存在するように、目的に適合した手段に関する知識は完全なものではない。けれども、この不完全さは、この世界においては、原理的に、あるいは将来、取り除くことのできるものとされる。このような目的—手段関係の認識に基づいた操作を特徴とするこの世界では、「待つこと」は、本質的に、重要な役割を果たしていない。①操作をしなれば何の目的も達成されず、ただ「待っていること」は無為無策にすぎない。それとは別のレベルで、②必要な操作を施したのちに、そこで一定の結果が生じるまで「待つこと」は不可避的である。だが、必要な操作を施していさえすれば、「待つ」際の「待ち方」は特に問題とならず、熱心に待っていても気晴らしをしていても「結果は同じ」なのである。また、もしも同じ結果をもたらすならば、「待つこと」の少ない過程の方が価値が高くとされ、「技術の進歩」とされる。この場合、「待つこと」は、取り除かれるべき必要悪なのである。いずれにせよ、道具的・機械的世界における「待つこと」は、本質的に、実り豊かなものではなく、そして、操作とは画然と区別されるという特徴を持っている。

こうして、道具的・機械的世界における「待つこと」は、結局、無為無策あるいは必要悪なのである。ここに、「待つこと」へのひとつの理念化が存在する。

さて、第2に、自然的世界における「待つこと」はどうか。自然的世界においては、たとえば動植物の成長を考えるならば、成長はいわばはじめから可能性としてその個体に組み込まれている。環境によって可能性の開花が多少とも促進されたりするにしても、その成長は、原

理的に、潜在的な可能性の発現という特徴を持っている。自然的世界におけるその特徴を人間の側から言えば、人間の操作的介入の無意味性と表現できる。したがって、自然的世界における「待つこと」には、人間の操作的介入の限界、自分の無力さの認識が含まれている。私たちは、十五夜の満月が夜空に輝くことを、「待つ」よりほかしかたがないと思いつつ、「待っている」のである。と同時に、自然的世界における「待つこと」は、私たちの操作や期待から独立した、自然の諸力に対する信頼を含んでいる。道具的・機械的世界においては、人間の操作なしには何の変化も期待できないが、自然的世界においては、人間の操作なしでの成長や変化が当然とされている。それどころか、その成長や変化のリズムを知っているだけで、私たちは安んじて「待つこと」ができるのである。

以上のように、自然的世界の「待つこと」には、自分の無力さと自然への信頼、という理念化が存在する。

さて、以上の二つの「待つこと」と対比して、生成の世界における「待つこと」を特徴づけよう。

道具的・機械的世界における必要悪としての「待つこと」においても、自然的世界における「待つこと」においても、「待つべきことがら」は明確であった。しかし、私たちは自分の人生の「目的」を前もって知ることはできない。ある時点では「目的」が明確であったとしても、時間の推移とともに、それは全く違う方向へと変わったり、方向は同じでもその内容が充実したり、あるいは不明確になったりすることがある。創造される作品や表現についても、表現されるにつれ、いろいろな変化を通じて少しずつ実現されてゆき、最終的に表現された後には、はじめて全体として明らかになるということがある。このように、生成の世界における「待つべきことがら」は、本質的に不確定なのである。

さらに、操作による変化の有無という違いはあっても、道具的・機械的世界と自然的世界においては、操作と「待つこと」とが画然と区別されていた。しかし、生成の世界においては、たとえば、行きつまった課題に対する「インスピレーション」が、別に何をしているのでもない休息時間に湧いたりすることがある。このことからわかるように、操作と「待つこと」との境界が不明瞭である。したがって、生成の世界における「待つこと」は、操作と対立したり操作を排除したりするものではなく、その中に操作をも含めた、より大きな連関なのである。

最後に、生成の世界における「待つこと」においては、「待ち方」と「待つべきことがら」との間の特徴的な二

重構造が存在する。すなわち、一方では、不明確なものであっても「待つべきことがら」によって、ある特定の「待ち方」が決まってくる。この点では、他の世界と同様である。しかし、他方では、生成の世界においては、ある特定の「待ち方」によって、不明確だった「待つべきことがら」が明確になる場合がある。また、他ならぬある特定の「待ち方」が、はじめには思いつきもしなかったことがらに気づくことを可能にし、そうして、はじめの「待つべきことがら」を充実・変化させ、新たな「待つべきことがら」を構成する場合がある。他の世界においては、「待ち方」が「待つべきことがら」を構成することはない。

以上のように、生成の世界における「待つこと」は、①「待つべきことがら」が不明確であること、②操作を含んだより大きな連関であること、③「待ち方」と「待つべきことがら」との間に相互依存関係があること、によって特徴づけられる。

Ⅱ 「歩み」

生成の世界における「待つこと」は、他の世界の「待つこと」との対比を通して、以上のような三つの特徴をもつことがわかった。では、生成の世界における「待つこと」とは、それ自体として、どのようなものなのだろうか。その内部にどのような諸契機があり、どのように特徴づけられるだろうか。

これから、サンテグジュペリによる「待つこと」の記述を検討しよう。彼の記述、すなわち、充実した生、充実した「待つこと」とは何かという問題意識にたった記述のうちに二つの様相を区別することができる(ⅡA)。そのうちのひとつ、「歩み」が、生成の世界における「待つこと」がそれ自体としてどのようなものか、というイメージを与えるだろう。また、生成の世界における「待つこと」の内的諸契機の特徴づけは、「歩み」の解明(ⅡB,ⅡC)によって与えられるだろう。

A 充実した「待つこと」の二つの様相

1. 「熱情」

サンテグジュペリによる次の記述を見よう。

徒刑囚たちの「つるはしのひと打ちは、ただつるはしとしての価値があるにすぎない。かくて、ひと打ち、またひと打ちとつるはしを振るうのである。ところが彼らの実質はなにひとつ変わらないのだ。ただぐるぐるとめぐるだけの、行き着く岸辺を待たぬ泳ぎである。そこには創造はなく、彼らはなんらかの光へ向かう道や運搬

ではない。だが同じように陽は照りつけ、道はきびしく、同じように汗を流そうと、年に一度、純粋なダイヤモンドを掘り出すことができるならば、おまえは、おのが光のうちにあって、渴仰に充ちているのだ。けれど、おまえのひと打ちは、別種の本性に属するダイヤモンドの意味をもつことになるのである¹²⁰。

この対比の一方の極には、徒刑囚たちの「つるはしのひと打ち」に象徴される「倦怠」ennui、無関心、意味の喪失という状態がある。「そんなことをしてなんになる¹²¹」という力のない嘆息が出る。そのような状態を直視する人は、現在が未来に関連づけられることもなく、誰のためという他者とのつながりもなく、たとえ何らかの仕事が続いているにしても、その仕事は自分の希望や計画に結びついておらず、かくて経験を構成する諸契機がそれぞればらばらであることに気づくだろう。「おお、私のうちに熱情が戻ってきてくれたらなあ¹²²」という叫びがでる。だが、倦怠のうちにあって、その状態を直視しない人は、結局あらゆることは空しいのだと自らを慰めたり、熱情のうちにある他者を皮肉に笑ったり、気の毒がったりするであろう。

いずれにせよ、このような倦怠の対極に、充実した「待つこと」のひとつの様相が存在する。その主観的側面に注目すれば、「熱情」ferveurによって特徴的である。その対象的な側面では、非常に明確な、それ自体素晴らしいと直接に感じられるダイヤモンドが「待つべきことがら」となっている。そして、未来において成就するであろう明確な「待つべきことがら」が、現在の「つるはしのひと打ち」を力強く支えている。このように特徴づけられた充実した「待つこと」を「熱情」と呼ぶことにしよう。

「熱情」においては、何ごとかを「直接に素晴らしいと感じる」ということが重要である。その「何ごとか」の素晴らしさの理由づけ（正しいから、美しいから、得だから、等）は、後からなされた表現にすぎない。先ほどの例で言えば、ダイヤモンド自体に美しさがあってそれが熱情をひき起こすのでもなく、ダイヤモンドを美しいと判断するから、それに熱情的になるのでもない。熱情においては端的にダイヤモンドが素晴らしいのである¹²³。このような意味で、熱情は、長続きのしない瞬間的なものであれ、その人だけにしか通用せず、他者には理解し難いものであれ、絶対的である¹²⁴。

このような「熱情」は、「渴き」soif とか「義務」obligation とか言い換えられても、それらが次の一点、すなわち、「心を昂揚させるもの」であるという一点を満足している限り、結局同じことを指している。

「鐘が鳴るのを聞きながら、その鐘がおのれからなにものをも要求しない人間は悲しい。喇叭が鳴り渡るとき、立ちあがる義務のないおまえは悲しい。それにひきかえ、ある男が、『私は自分への呼びかけを聞いた。さあ行こう』と語るなら、おまえはその人間を幸福な者と思うだろう¹²⁵」。

2. 「歩み」

「熱情」が生全般に満ちている人は幸福であろう。しかし私たちは、「熱情」があまり長続きしない場合があることも感じている。「熱情」のほか、充実した「待つこと」が存在するのではないだろうか。サンテグジュペリが次のように言うとき、そこに、充実した「待つこと」のもうひとつの様相を見出すことができる。

「歩みだけが重要である。歩みこそ、持続するものであって、目的地ではないからである。旅人は、あたかも目的地がなにかの意味を持つかのように、峰から峰へと道を進むのだが、目的地とは、そのようなとき、旅人が抱く幻想にすぎない¹²⁶」。

「おまえは、宿りの地について、なにひとつ知ることはできない。それらは、言語のでっちあげたものにすぎないのだ。おまえが進む方向だけが意味をもつ。重要なのは、なにかに向かって進むことであり、いたり着くことではない¹²⁷」。

ここに、「熱情」とは区別される、充実した「待つこと」のもうひとつの様相がある。それをサンテグジュペリに従って、「歩み」*démarche* と呼ぶことにしよう。

「歩み」は、「熱情」と対比して特徴づけることができる。第1に、「熱情」においては、ある目的が絶対化されていたが、「歩み」においては、目的が「幻想」*illusion* という強い表現によって否定され、相対化されている。

では、あらゆる目的が無意味なのだろうか。ここで、その相対化の方向性を見る必要がある。

サンテグジュペリは、自分の足で登攀することによってきわめた山頂の景観という例を、充実したひとまとまりの行為を表現するための典型として、頻繁に用いている。山頂の景観の素晴らしさは、山頂からのたんなる景色にすぎないのではなく、同時に、自分の努力なり登攀による「筋肉の疲労」や「成し遂げられた秩序に対する満足感¹²⁸」などによって構成されたものだとされる。したがって、もしかりに、自分の足で登攀することなく、誰かに運ばれて山頂に行ったらすれば、そこからのながめは、「多かれ少なかれ色褪せた事物のたたずまい¹²⁹」にすぎない。さらにまた、自分の足で登攀した山頂の景観

も、それが筋肉の疲労や満足感などによっても構成されているがゆえに、その山頂で休んでいるうちに「磨滅」してしまう²⁹⁾。このように、山頂の景観とは、所有したり貯えたりすることのできる、長続きするものではないことが明らかにされる。

サンテグジュペリが、「歩み」における目的は「幻想」であると言う時、そこには二つの意味が含まれている。①実際に登攀する以前に、筋肉の疲労や満足感によっても構成されているところの山頂の景観を、前もって表象することは不可能であるために、前もって思い描かれた目的は幻想にすぎないという意味において、②山頂の景観が自分の登攀によって獲得されたとしても、景観を貯えたり所有したりすることはできず、したがって、それ自体で充実したものとしての目的地は幻想であるという意味において。

さて第2に、「待つべきことがら」に関する対比を挙げよう。「熱情」においては、達成されるべき未来のできごとが明確であり、それが目的として現在を支えていた。だが、「歩み」においては、相対化された目的は、明確な場合もありうるし、不明確な場合もありうる。明確な場合には、「歩み」は軽快なものとなり、不明確な場合には、重苦しいものとなる。「歩み」はいずれの場合をも含んでおり、「歩み」における「待つべきことがら」は、不確定なのである。「歩み」における、不確定な「待つべきことがら」を、特に、「面ざし」visage と呼ぶことにしよう。

第3に、時間構造における区別がある。「熱情」においては、目的という未来の「待つべきこと」によって現在が支えられていたのだが、「歩み」においては、目的は不確定であり、面ざしとなっている。それにもかかわらず、「歩み」が「歩み」としての統一を持つことの背景には、未来から現在への支えだけではなく、現在から未来への反対方向の支えが存する。「歩み」における現在の経験が面ざしを明らかにすることにおいて、現在が未来を支えているのである。したがって、上述の「待つべきことがら」の不確定性という特徴には、ただ単に明瞭な場合も不明瞭な場合もあるという可能性だけでなく、さらに、面ざしが現在の経験によって充実したり変化したりするという可能性をも含めて考えなければならない。上述したボルノウの用語を使って対比を明らかにするならば、「熱情」は「閉じられた時間」であり、「歩み」は「開かれた時間」である。「歩み」がどのような「開かれた時間」であるかは、次節で検討する。

以上の対比を通じてわかるように、「熱情」と「歩み」

は、必ずしも、同じ次元上の反対極をなしているのではない。両者の相互関係については、さらに以下で説明される。さて、「歩み」の特徴は、①目的の相対化、②「待つべきことがら」の不確定性、③現在から未来へ、未来から現在への両方向の支えあい、であった。「歩み」がそもそも行為を排除していないことを考えあわせると、「歩み」が、前章で特徴づけられた、生成の世界における「待つこと」の三特徴、すなわち、①「待つべきことがら」の不確定性、②操作を含んだより大きな連関、③「待ち方」と「待つべきことがら」との間の相互依存関係、を満足していることがわかる。したがって、生成の世界における「待つこと」とは何か、という問いに対する答は、「歩み」をさらに解明していくことによって与えられる。

B 「歩み」の時間的構造

1. 未来と現在

「熱情」においては、未来が現在を支えている。だがもし、「熱情」のうちにある人の「待つべきことがら」が、なんらかの事情で不可能となった場合、新たな「熱情」の対象が見つからない限り、その人の現在は全く空虚になってしまう。「熱情」においては、目的としての未来から切り離されると、現在は未来を作り出すことなく涸渇するのである。それは、現在が未来を作り出した方向づけたりするという、現在から未来への支えが存在しないからである。ここに熱情の脆さがある。

さて、「歩み」はさまざまな形態をとりうる。面ざしの不明確さと、現在から未来への支えとの、二つの次元によって四つの極限形態が考えられる。①面ざしの不明確さという霧が薄く、かつ、現在から未来への支えが弱いという場合の極限形態として、「熱情」は「歩み」の中に位置づけられ、包摂される。②面ざしの不明確さという霧が薄く、かつ、現在から未来への支えが強いという極限形態が考えられる。この場合、「歩み」は軽快なものとなり、また状況の変化に柔軟に対応して未来を築いていくことができるだろう。③面ざしがきわめて不明確であり、現在から未来への支えが弱いという極限形態もある。その場合、「歩み」は非常に重苦しく、途方にくれたものとなるだろう。「歩み」はほとんど不可能となり、自然的世界の「待つこと」、すなわち、そうした五里霧中の状態が変化してくれるのを「待つこと」しかできなくなるだろう。④面ざしがきわめて不明確であり、現在から未来への支えが強いという極限形態もある。このとき、「歩み」は、方向性はまだ不明な、しかし力強い試行錯誤となるだろう。

「歩み」は、これらの極限形態の間に存在する。しかし、「歩み」がどのような形態をとろうとも、「歩み」における現在には、多かれ少なかれ、未来を方向づけ、切り拓き、築き上げるという特徴が存在する²³⁾。「歩み」における未来と現在は、未来が現在を支え、現在が未来を支えるという、相互関係によって結びつけられている。

2. 過去と現在

「熱情」のうちにある人にとって、過去は重要な役割を果たしていない。したがって、ここでは、「熱情」との対比は有効ではない。

「歩み」における過去と現在との関係は、サンテグジュペリによると、「今日の日を与えられているがままに受け入れること」²⁴⁾である。だが、現在をありのままに受け入れることを疎外する、二つの過去—現在関係がある。

その第1は、後悔において過去を振り返ることである²⁵⁾。後悔するとは、あの時こうすればこうなっていた筈だ、そして私の現在は別の形であるだろうにと考えることである。このとき、現在という視点から過去が作りかえられ、その偽造された過去という視点から見て未来であるところの現在において、空中楼阁が築きあげられている。もちろん、現実の現在は空虚化している。

第2は、過去におけるいろいろな目的の達成——それが自分の足によってかちとられた山頂の景観であったとしても——を、現在においても所有していると考えてしまい、過ぎ去った過去の充実に住居することである。過去がどれほど輝かしいものであったとしても、その輝かしさ、偉大さは、常に現在において試されているのであり、成し遂げられた征服への固執は現在を空虚化してしまう。

それらに対して、「歩み」における過去とは、現在と切り離され、現在から独立に存在しうるものではなく、現在与えられているものなかにあり、現在を今あるがままの形で与えているものである。他方、現在はまた、次のように過去を支えている。すなわち、一歩前へと進むことが、単に前へと片足を踏み出すだけではなく、もう一方の足が地面を踏みつけ、それを後ろへと蹴ることでもあるように、「歩み」によって現在が過去として固められ、取り返しのつかない必然として後ろに残されていく。そして、過去となった現在が、ふたたび新たな現在を支える。このような相互関係が「歩み」における過去と現在とを結びつけている。

「歩み」においては、以上のように、未来と現在、過

去と現在が、相互に緊密な関係をもっている。サンテグジュペリは、その緊密な関係の軸としての現在の重要性を、次のように言う。

「つねに、秩序づけるべき現在しか存在しない。かの遺産をあげつらうことが、なんになるろう。未来に対しては、おまえはそれを予言することではなく、可能ならしめねばならないのだ。(中略) 真の創造というものは…過去から遺産として受けとった雑然たる素材の山である、現在のうちに読みとられた、新たなる面ざしなのだ」²⁶⁾。

C 「歩み」における時間以外の諸契機

「歩み」は、生成の世界における「待つこと」として操作をも含めた大きな連関として把握されているので、時間的構造ばかりでなく、他の諸契機によっても支えられている。つぎに、それらのうちから、他者と自己との関係、および、事物と自己との関係を考察しよう。

1. 他者と自己

サンテグジュペリは言う。

「仲間たちがほんとうの仲間であれば、(中略) 仲間のひとりがなにかの賞を得たとき、他の者たちは皆、あたかも自分たちが豊かになったかのような思いを味わう。賞を得た者は、仲間のために心誇らしく、腕に賞をかかえて、顔を赤らめつつ姿を現わすのである。だが、かかる仲間ではなく、単に人間の集まりにすぎぬ場合は、賞は、それを得た者にとってしか意味のないものとなるだろう。また彼は、他の者たちが賞を得なかったことを軽蔑するだろう。他の者たちもまた、賞を得た者を羨望し憎むだろう。けだし、皆、われこそはという期待を裏切られたからである」²⁷⁾。

前者のような「本当の仲間」は、「同一の構造に尽している場合」²⁸⁾に可能である。そこでは、他者と自己との関係は充実している。それに対して、後者における他者との関係は、明らかに充実していない。「本当の仲間」と共にある時には充実しており、疑いもなく幸福だろう。しかし、サンテグジュペリは、他者と自己との充実した関係が「本当の仲間」だけであるとは考えていなかった。もちろん、どのような「構造に尽すこともなく、ただ対立によってのみ生きる者」²⁹⁾と充実した関係を結ぶことはできないが、異った構造であっても、それに真に尽している者とは、敵対関係やたたかきを通じて、充実した関係を結ぶことができる³⁰⁾。

したがって、サンテグジュペリにとって、他者と自己との充実した関係は、敵・味方の区別を超えて、異同を

問わず何らかの構造に真に尽していることによって可能となる。このような充実した関係は「結縁」alliance と呼ばれる。「たとえ私が、おまえを短刀で突き刺しても、結縁はわれわれを結びつけることができるのだ」³¹⁾。

「本当の仲間」と「結縁」との関係は、「熱情」と「歩み」との関係と同じく、より一般的である後者が、ひとつの極限形態として前者を包摂する関係である。

2. 事物と自己一事物の意味

「歩み」において、事物とか世界は、私たちに對して「意味」を伴って現われる。「意味」にはさまざまな語義があるが、ここで問題としたいのは、とりわけ、心情や精神に働きかけ、経験の全体を支配し、彩るような「生きられた意味」であり、私たちの経験や生から多少とも遊離した、「客観的意味」ではない。

ここでも、サンテグジュペリによる対比が示唆的である。

『ほら見てよ、僕の軍艦を』と、3個の小石を並べた7才の船長が言う。『ほんとうにすてきな軍艦だね』と、心干からびた男は答える。彼はその弱々しき眼で、そのいくつかの小石を見ているにすぎないのだ³²⁾。

7才の少年の経験には、「生きられた意味」としての軍艦があった。少年にとって、三つの小石は、それぞれ軍艦の舳先なり煙突なり大砲なりの位置を占めていたのだろう。その時もしも別の人がやってきて、つまずいてその三つの小石の配列を変えてしまったり、あるいはその小石のひとつを持ち去ったりすれば、少年は悲しんだり怒ったりさえするだろう。そしてまた、少年の経験において、その三つの小石は、どうでもよい地面にただ配置されているのではなくて、波静かな、あるいはうねり高い海上を進んでいるのであり、三つの小石が配置された(大人にとっての)地面が、小石と共に重要性もっているだろう。これにひきかえ、ただの小石を見ているにすぎない大人にとっては、その三つの小石の配列が変わろうが、それらのひとつが持ち去られようが、背景が地面であろうがなかろうが、どうでもよいのである。大人にとっては、三つの小石相互の配列にも、小石と背景との間にも、大人自身と小石の間にも、つながりが存在せず、それらの素材は互いにばらばらなまま存在している。だが、その少年においては、素材相互の関係が緊密である。その緊密な相互関係は、ある小石が煙突であるためには、他の二つが舳先や大砲である必要があり、舳先の小石が舳先であるためには、他の二つが煙突や大砲でなければならぬような、少年がそこに軍艦を見たという経験の内部においてのみ成り立っているところ

の、内的な相互依存関係である。

「生きられた意味」とは、このような、内的な相互依存関係である。サンテグジュペリは、この内的な相互関係を「構造」とも「絆」lien とも呼んでいる³³⁾。

この内的な相互依存関係の緊密さと、素材の豊かさとを区別しなくてはならない。単なる素材の量の多さは、素材相互の内的依存関係の発生や顕在化を困難にするという側面すら持っており、それだけでは「生きられた意味」を構成しない。

先ほど「歩み」を熱情から区別し、時間的構造を検討した際には「面ざし」はただ単に「待つべきこと」とされていた。だが、「歩み」を導く面ざしとは、内容的に言うところ、経験の全体を支配し、彩る「生きられた意味」なのである。したがって、ここに「意味」が「歩み」を導くという方向性が存在する。

ところで、この「意味」はどのように発生し顕在化するのだろうか? 「意味」自体を私たちが少しずつ築きあげていく、というわけにはいかない。「意味」とは、私たちに對して、程度の差はあれ突然に襲ってくるものだからである。だが、他方で、「意味」は「歩み」のないところに発生することはない。「雷電がおまえの心を打った。しかし、おまえの心は、すでにその雷電を受ける準備が整っていたのである」³⁴⁾。ここに、「事物の意味は、歩みのうちに宿る」³⁵⁾ という方向性が存在する。

このように、「歩み」と「意味」とは、相互に関連し、等根源的である。その両者は、生の充実というひとつのことがらへと通じる、時間的契機と内容的契機という二つの道なのである。

D 「あやまり」と「歩み」

これまでの「歩み」の記述から、私たちが得ることのできる示唆のひとつに、「あやまり」の問題がある。

「あやまり」とは、常識においては、ある「正しい」尺度や基準からのズレである。なかでも、行為の結果明らかになった「あやまり」は「失敗」と呼ばれる。

「あやまり」と「真実」との関係を見よう。「真実とは、次々にあやまりを重ねることによって作りあげられるものなのだ。(中略)創造とは、次々と失敗を重ねることによって作りあげられるものなのだ」³⁶⁾。「あやまり」のない立場に立っている限り、「真実」や「創造」の形成は不可能である。「歩み」においては、「あやまり」が「真実」へと、「失敗」が「創造」や「成功」へと転化する可能性が、一個人のなかでも、結縁にある他者のなかでも、常に存在する。

他方、「真実」とか、「成功」や「創造」とかも、生成

の世界においては、貯えたり所有したりすることができぬ故に、長続きするものではない。長続きするとされた「真実」は「あやまり」へと転落してしまう。生成の世界におけるどれほど偉大な達成といえども、次の生成の素材となり、変形されるまでは、単なる「瓦礫の山」であり「腐食土」であるにすぎない。小さな達成もまた然りである。

結局、生成の世界における所産は、規模を問わず、「失敗」「成功」「あやまり」「真実」の別なしに、すべて「腐食土」、あるいは、新たな生成に対する可能な素材となる。「失敗」「成功」等は、それぞれのやり方で、生成の世界に貢献しているのであって、それらの貢献の度合に違いがあるわけではない³⁷⁾。

すると、このひとつの巨大な生成の世界という視点から見るならば、私たちの個々の「歩み」が「あやまり」であるか「真実」であるかという心配は、どうでもよい「迷い」にすぎない。ましてや、私たちの誰が「成功」するかなど、どうでもよいことである。さらに、同じ結果を得るための時間の節約は、問題にもならない。ただ「歩み」、高次の人間へと生成することが重要なのであって、ある結果に到達することは、「歩み」から切り離されるならば、全く根拠を失ってしまうからである。

生成の世界には、ただ「歩み」があり、常識的な意味での「真実」と「あやまり」、「成功」と「失敗」を、「歩み」において区別する必要はないのである。

おわりに

本稿では、多様な「待つこと」を概観し、その多様性を、主観的側面と対象的側面のそれぞれにおける分節化によって、一步内容的に明らかにし(IA)、その多様な「待つこと」から、生成の世界における「待つこと」を特徴づけた(IB)。そして、サンテグジュペリによる充実した「待つこと」の記述のうちに、生成の世界における「待つこと」の特徴を満足する、「歩み」を見出し(IIA)、ついで、「歩み」の時間的構造(II B)と、時間以外の諸契機——「他者と自己」「事物と自己」——(IIC)を解明した。最後に「あやまり」について、生成の世界における「待つこと」の理解がもつ示唆に触れた(IID)。

この考察を通して「待つこと」についての常識的理解の特徴も明らかになる。「待つこと」の常識的理解においては、道具的・機械的世界における理念化、すなわち「無為無策」あるいは「必要悪」としての「待つこと」と、自然的世界における理念化、すなわち、「無力」と「信頼」としての「待つこと」とが、もつれ合ったまま

だったのである。そこでは、あるひとつの世界における「待つこと」が他の世界においても通用すると前提されていたり、あるいは、「待つこと」の多様性が分節化されることなく、ただ漠然と感じとられていただけだったのである。

さて、生における「待つこと」についての豊かな理解によって、さらに、自由と拘束、創造における苦しみとよろこびといった問題に対して、ひとつの展望が開けてくる。

しかし、「待つこと」の解明は、他者の生成を「待つこと」他者に生成を「待たれていること」の記述によって、社会性を統合し、さらに、教育に対する多くの示唆を与えることができるようになるだろう。そのためには、他者の「歩み」に介入する可能性の根拠としての、複数の「歩み」の相互関係、および、表現・理解・創造などの社会性の問題を考察する必要がある。この考察に対して、サンテグジュペリは、なお多くの手がかりを与えてくれるだろう。今後の課題としたい。

(指導教官 吉田章宏助教授)

注

- 1) 私たちが後で見る、O. F. ボルノウは、その僅かな例外である。
- 2) サンテグジュペリ Antoine de Saint-Exupéry は、『星の王子さま』の著者。『城砦』は、1936年から1944年まで書き続けられた断章の集積が編集されたもの。
- 3) 「私は、人間に対して、あまりにも忘却された神々としてつねにまずかの沈黙と緩徐とを讀えてきたのだ。』『城砦』(全3巻、山崎庸一郎、栗津則雄訳、みすず書房、1962-3) § 56; I巻, p. 283; 原著 *Citadelle*, Gallimard, 1959. 引用は、文脈上、邦訳とは多少変えたところもあるので、原著の頁数を付し、§ 56; I, p. 283; p. 197という形で、以後略記する。
- 4) この悟りを徹底した理念化が、ストア派のアパテイアの中に見とれる。John Rist, "The Stoic Concept of Detachment", in John Rist (ed.), *The Stoics*, p. 259 ff. 参照。
- 5) 強制収容所のなかでは、実にさまざまな「待つこと」が存在し、その「待ち方」が生死を分けることすらある。ヴィクトール、フランクル『夜と霧』霜山徳爾訳、みすず書房、1971, p. 179 ff. など、参照。
- 6) ボルノウ、『実存主義克服の問題——新しい被護性』、須田秀幸訳、1969、未来社、p. 83
- 7) 同上書、pp. 86-7
- 8) 同上書、pp. 88-9
- 9) 同上書、p. 91
- 10) 同上書、pp. 129-130
- 11) Alfred Schutz, Thomas Luckmann, *The Structures of the Life-World*, Heinemann, London, 1974, p. 47
- 12) 『城砦』, § 188; III, p. 172; p. 510
- 13) 『城砦』, § 46; I, p. 239; p. 168
- 14) 『城砦』, § 83; II, p. 96; p. 258
- 15) 「おまえの心を昂揚させるもののみを私は真実と呼ぶ。…

- …もしある面ざしと共鳴するなら、おまえはその面ざしのうらわしさをけっして疑わない。そのときおまえは、うらわしいがゆえに、その面ざしは真実であるというであろう。』『城砦』、§120；Ⅱ、p.235；p.346
- 16) 「信念と熱情と願望より生まれる絶対のみにみ価値がある。』『城砦』、§75；Ⅱ、p.67；p.240
- 17) 『城砦』、§83；Ⅱ、p.99；p.261
- 18) 『城砦』、§49；Ⅰ、pp.252-3；p.177
- 19) 『城砦』、§54；Ⅰ、p.268；p.188
- 20) 「誰もその急坂を登らなければ、山々の高みから見出される景観というものはない。なぜなら、その景観なるものは、なによりもまず、単なる眺めではけっしてなく、征服なのだから。(中略) 景観とは、満ち足りた気持で胸のうえに腕を組む人間にとって、努力のあとの呼吸と筋肉の安らぎ、それに青みを増しゆく夕暮が混然と一体になったものであり、かつまた、成し遂げられた秩序に対する満足感でもあるのだ。』『城砦』 §31；Ⅰ、pp.189-190；p.136
- 21) 同上。さらに続けて：「景観とは彼から生まれたものであり、私が彼のうちに見出す喜びは、小石を並べておのが都市を建ておえ、それに驚嘆し、それを自分で満たす子どもの喜びそのものなのだ。だが、努力なき眺めにすぎぬ石の堆積を見て、幸福に感じる子どもがあるだろうか？」
- 22) 「山々の頂きで見出した風景は、心情のうちにあって急速に磨滅する。それは疲労のこしらえあげたもの、筋肉がある状態にある時にしか意味を持たないのである。そして、いったん休息をとり、前進の渴望に心を奪われると、まえと同じこの風景が、ほどなく、おまえに欠伸をもよおさせ、もはやおまえに与えるなにもも持たぬようになる」『城砦』、§35；Ⅰ、pp.202-3；p.145
- 23) 「未来を築くとは、現在を築くことである。今日のためのものなる欲求を創造することである。すなわち、明日へと向かう今日のものであるところの欲求を。明日のためののみ意味を有する行為は実在性を欠く。』『城砦』、§114；Ⅱ p.214；p.332
- 24) 『城砦』、§56；Ⅰ、p.277；p.194
- 25) 「もしおまえが、おのれの蒙った傷を悔むならば、それは別の時代にいないことを悔むようなものだ。けだし、おまえの過去はすべて、今日の誕生にほかならないからである。過去は今日あるがままのものであり、それに尽きる。過去をあるがままにとるがよい。』『城砦』、§48；Ⅰ、p.252；p.177
- 26) 『城砦』 §56；Ⅰ、pp.278-9；p.195
- 27) 『城砦』 §176；Ⅲ、p.129；pp.481-2
- 28) 同上
- 29) 「この男は悪に逆らって存在している。したがって、悪によってしか存在していない。悪がないとしたら、いったい彼はどうなることだろう。』『城砦』 §118；Ⅱ、p.227；p.341
- 30) 「おまえを攻め滅ぼそうとするものと、おまえを築きあげるものとを区別すべきではない。(中略) おまえの敵とは、おまえの鑄型である。なぜなら敵は、おまえの城壁の内部において、おのれを築きあげるように強いるからである。』『城砦』 §108；Ⅱ、p.175；p.308
- 31) 『城砦』 §38；Ⅰ、p.216；p.154
- 32) 『城砦』 §199；Ⅲ、p.237；p.551
- 33) 『城砦』 §63；Ⅱ、pp.16-17；p.208参照。
- 34) 『城砦』 §120；Ⅱ、p.237；p.347
- 35) 『城砦』 §5；Ⅰ、p.49；p.39
- 36) 『城砦』 §208；pp.301-2；p.594
- 37) 『城砦』 §9；Ⅰ、p.80；p.61参照。